

四、『未来を視る者』

0

母が昔、わたしに笑いながら話してくれました。
あなたの最初に喋った言葉、何だか分かる？
わたしはその問いに首を振ります。

そんな昔のこと憶えているわけじゃない、と言いながら。

母はそれもそうね、と言いながらわたしが最初に喋った言葉を教えてくれました。

・・・汚い、だったそうです。

公園で遊んでいる子供達を眺めながら、ベンチに座っていたわたしはそう言ったそうです。
汚い。

母はよほどおかしかったらしく、目に涙を溜めながら言いました。

いつも家にいたから、きっと、泥だらけで遊んでいた子供達が珍しかったのね、と言いながら。

わたしもそうね、と言って笑いました。

笑いながら、母の勘違いに嗤いました。

あれは、そういう意味では決していないことを知っていたから。

あの頃から、わたしは普通の子供ではなかったことを知っていたから。

あの意味。

彼らを見て「汚い」なんて言った意味。

それは。

彼らのこれから進む道を視てしまったから。

汚れて泥だらけの心が視えてしまったから。

人間の汚さを識っていたから。

だから、わたしは口にしたのだろう。

汚い、と――



わたしには未来は視えません。

ですが、人々の進む道^{レール}を視ることが出来ます。

そこに大きな落とし穴があっても、取り除く力は、わたしにはありません。

わたしは非力な人間です。

何も出来ない、無力な人間です。

・・・ああ、神様。

なんで、そんなわたしにこんな力をくださったのですか？

わたしはこの眼が嫌です。

視るだけで何も出来ないこの眼が嫌いです。
わたしが望むとしたら、それはただ一つ。
普通の人間に戻してください。
化け物はもう嫌です——

1

「はあー。やっと放課後だ・・・」
わたしこと、卯月^{うづき} 未来^{みき}はホームルームが終わり、担任の去った教卓を眺めながら、軽くため息を吐いた。

——今は六月。

祝日休みが無く、憎たらしい月だ。

わたしは、よく言う『五月病』ではなく『六月病』だ。

一年の中で一番、六月が嫌い。

とにかく、祝日がないということが一番やだ。

国会議員の人達も、何とか理由をひねり出してお金をせしめる能力があるなら、祝日の

一つぐらい増やせと思う。

でもま、週休二日ってのはかなり迷惑だけど。

・・・ったく、何が、ゆとり教育だ。

わたしの学校では、学力低下を防止するために土曜日は全部補習授業になってしまった。

・・・いや、あれは捕囚^{とらごう}授業だ。

普通、補習授業は赤字取ったり、学校サボったりした連中が受けるモノだが、この捕囚

授業は生徒全員強制参加。

親たちは授業料が儲かるだとか何とかヌカして喜んでいるが、生徒にとってはたまった

モンじゃない。

ばつきやろー！

ろー

ろー

ろー

・・・・・・はあ。

心の中で叫んでも意味ないか・・・・・・

いつの間にか、教室には誰もいなくなっていた。

まあ、放課後だしね。

高校生は部活に遊びに忙しいし。

ま、わたしには関係ないけどね。

帰宅部だし。

バイトないし。

・・・まあ、夏休みとかにはしてるけどね、バイト。

さて・・・。

わたしは教科書類を鞆にしまうと、席を立つ。

「ゆうちゃん、まだMD返してくんないなあ〜」
わたしはちらりと後ろの席を見やる。

そこは五月ぐらいから、学校に来なくなった級友の席だった。
理由は知らない。

わたしの知る限り、このクラスで彼女に対するいじめは起きてなかったと思うし。
でも、彼女に対するクラスメイトの態度は知っていた。

まるで、異邦人を見るような彼らの目を知っていた。

確かに、彼女は髪を染めて、校則で定められている以上にスカートの丈を短くしていた。
化粧を教員免許を本当に持っているか疑わしい、用心棒の筋肉アクセサリーみたいな猪
突猛進な生活指導の馬鹿教師から怒られるのも日常茶飯事だった。

進学校で、校則に厳しい学校の中で確かに彼女の存在は異質だった。

・・・彼女は異国人だった。

この国の、人間じゃなかった。

だから、彼女は自然に独りぼっちになった。

——正直、彼女も息苦しかったのだろう。

だから、少しでも新鮮な空気を吸おうと足掻いたのだ。

髪を染めて、

スカートを短くして、

生活指導の先生に怒鳴られながら、

足掻いたのだ。

足掻き続けたのだ。

でも、もう疲れたんだと思う。

——がりがりは、もうよそう

どっかの名前のない猫のように、そう思ったんだと思う。

だから、彼女は来なくなったのだ。

・・・うくん、どっかの三文小説みたいになってきたなあ・・・

でも、似たようなもんだらう。

「あの曲、好きだったんだけどなー」

しかも、T S U T A Y AでCD借りてMDにコピーした為に、CD持っていない。

また借りるのも、お金の無駄な気がする・・・

「はあー」

憂鬱だ。

出るのはため息ばかり。

窓の手すりにもたれ掛かり、外の光景を眺める。

これでちよつと影のある謎の美少女だったら、実に絵になる光景なのだが、残念ながら、
わたしのおさげ+とんぼ眼鏡+幼児体型な自他共に認める地味なカッコではちよつと無理
そうだ。

おー、うちの野球部負けてんじゃん。

しかも、ほぼ、コールドゲーム。
十年前だか何百年前だか忘れたが、一回だけ甲子園出場したことを誇ってる奴らにや、
似合いな負け方だ。

もつと、負けるー。

「仕方ないな・・・」

わたしは鞆を担ぎ、教室を後にする。

このまま試合見てたつてつまらんし、そもそもわたしは野球のルール知らんし。

向かうは図書室。

わたしのお気に入りの場所だ。

私は幼少の頃から、本が好きだ。

特にファンタジーがお気に入り。

王道であるJ・R・R・トールキンの指輪物語やホビットの冒険から、ハリー・ポッターまで、とにかく魔法やら魔物やらが出る話が好きだ。

どうせなら、本当にこういう話が起これば面白いとかと、たまに思ってしまうけど、やっぱりこういう話はお話であるから面白いのだ。

未来が見えた方が面白いとかと言う人がいるけれど、実際に見えたら不幸なのと同じように。

物語は物語のままが幸せなのだ。

・・・そう、物語のままの方が――

気がつくのと、図書室の目の前に来ていた。

・・・ちよつとぼーつとしすぎたかな？

「あれ・・・？ 鍵かかっている」

おかしいな・・・？

鍵なんて掛けていること珍しいのに・・・。

うちの学校の図書室は、自習室のような役割も果たす。

だから、常に開放してあるはずなんだけど――

「まあ、いや」

わたしはポケットからヘアピンを取り出して、それを南京錠の中に挿入する。
待つこと二分。

がちり、という手応えのある音と共に、南京錠が外される。

「まあ、別にいいわよね。ここで馬鹿騒ぎするわけじゃないんだし」

がらりと、扉を開ける。

「さて、何読もうかなー」

一歩、図書室へ踏み出す。

・・・この臭い、何、この臭い。

それに――

・・・ここ、プールだったっけ？

違う・・・よね？

プールって、室内にないもんね。

ああ、室内プールってのもあるか。

・・・でも、プールの水ってドロドロしてたっけ？
それに、こんなに赤い？

・・・やっぱり、これは血？

だよね・・・。血じゃなかったら、片栗粉を溶かした色水ってところかな。

でも、そんなものをぶちまけるような酔狂な奴はいないだろう。

やっぱり、これは血だ。

しかし、何でこんな所に血がぶちまけてあるんだろう？

その解答は直ぐに出た。

図書室のカウンターに、肉塊が数個。

多分、これから出たんだろう。

「密室殺人か・・・」

ばっかじゃねえの？

せつかく密室にしたのに、何で他殺死体があるんだ？

密室にしたら、

罪を隠蔽するなら、

他殺じゃ意味がない。

自殺じゃなきや、完全犯罪にならない。

「本当に無意味だ・・・」

呆れてしまう。

どこの馬鹿か知らないけれど、詰めが甘い。

十点だね。

いや。

この南京錠に目を付けたところにボーナス点として一点追加しておこう。

計十一点。

落第決定。

ごくろーさん。

・・・南京錠？

・・・あくやっぱやめだ。

よくよく考えてみたら、これ、小学生でもできるトリックだった。

図書室出るとき、事前に自分の持っていた南京錠で鍵を掛ければいいんだから。

わたしの手にある南京錠は真新しい。

わたしの記憶では、この南京錠は確か、もっと古かったはずだ。

つてことは、ここ最近変えたつてことだろう。

はい。

簡単に密室の完成。

おめでとー。

多分、職員室に本物の南京錠が保管されているだろうな。

つたく、密室でも何でもないじゃん。

暇つぶしにもならないわ。

マイナス十一点。

計0点！

・・・ここで、ふと、気付く。

何でわたし、こんなに冷静なんだろう。

死体があるんだぞ？

密室（もどき）殺人事件なんだぞ？

何で、こんなに冷静なんだ？

・・・ああ。

こうなること、あの肉塊の誰かを視て薄々気づいていたからか。

犯人も、視ればよかつたんだけどな。

・・・それは虫が良すぎるか。

さあて、どうしたもんかねえ・・・

途端、誰かの足音が聞こえる。

「そこで何やってるんだ？」

現れたのはうちのクラスの担任。

眼鏡の貴公子とかなんとか女子に囁かれている、学校で人気の教師だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

先生はこの光景を暫し呆然と眺め、

「一体これは何なんだ？」

「そりゃあ、殺人現場でしょう」

という、わたしの答えに失神してしまった。

・・・根性ねえな。

ま、優男にそれを求めるのは酷かな？

あーあ、これじゃあ完全に容疑者わたしだよ・・・

2

「――で、鍵が掛かったからヘアピンで開けたら、こうなっていた、と？」

ここは職員室の隣の進路指導室。

いや、進路指導室なんてのは名目で、要するに必ず学校に一つあるしごき部屋。

校内全面禁煙のほすなのに、煙草をふかしながら生活指導の教師がわたしに尋ねる。

ま、爬虫類のごとき駄脳の持ち主が、文字を認識できるとは思わないけどね。

ちゃんと、携帯灰皿を持っていることだけは誉めてやるか。

「ふざけるなっ!! そんなこと信じられるか!!」

あー唾が飛ぶ。

つてか、今週の生活目標は確か、『人を信じてみよう』じゃなかったか？

真っ先に自分が破ってどうするんだ？オイ。

「・・・じゃあ聞きますけど、仮にわたしが犯人だとして、どうやって彼らを肉塊に変えたんですか？ こんなもん、精肉工場とかにある挽肉作るやつじゃなきゃ、出来ないでしょう？ 男だか女だかも分かんないぐらい、ぐちゃぐちゃになってるし、こんなもの、一般の高校二年生が出来るわけじゃないでしょう？」

「ぐっ……それはお前がトリックを使ってだな——」

「こんなもん、トリック使う必要ありますか？ そりゃあ、わたしが挽肉作る機械をこの学校に隠していたら別ですよ。でも、そんなでかいのすぐに見つかります。トリックにするなら、それこそ、光学迷彩とかSFちつくなもんを引っ張りださなきゃ、無理でしょう。流石の三流ずぼらな作者でも、そういうマヌケなお話は多分書かないし。もし、わたしが犯人だとしたら、まず、この図書室の密室を最大限に利用して、自殺に見せかけます。練炭とかガスボンベとかその辺に置いておいて、いかにも集団自殺したように見せかけます。幸いにも、どうやらこの元・人間なモノ達は肉塊の大きさから判断して、三人以上みたいだし、集団自殺を演出するには好都合な人数ですしね」

わたしは言いながら、肩をすくめる。

こういうときは、とにかくふてぶてしい態度を取るに限る。

相手を極限まで怒らせ、主導権をこちらに回させるのだ。

「貴様……大人を舐めるのも大概にしるよ……」

「じゃあ、生徒にもっと尊敬されるような教師になってください。そしたら、ちゃんと紳士的な態度で話し合いに応じます」

「っんだと……この小娘……！ 学年主席だか、校長のお気に入りだか何だか知らないが、俺が今ここで貴様のことをひんむいて晒してやってもいいんだぞ？ あア？」

「そうしたら、セクハラで訴えるだけです」

言って、わたしは鞆からMDを取り出した。

「ちなみに、今までの会話は全てこれに記録されています。あんまりヘタなこと言うと、校長か理事長にディスクを渡す覚悟がありますので、そのつもりで」

「っ……」

おーおー黙った黙った。

これ、再生専用のMDなんだけどなあ。

しかも、マイク付いてないじゃん。

気付よ。

っつゆーか、怪しめ。

本当にそんなことする気なら、わざわざ対象者の前にMD見せないだろ。

やっぱり、こいつには思考なんていう高等技術は無理なんだろうなあ……

それより——

わたしはそんな教師を無視し、自身の思考回路をフル稼働させる。

……この事件、おかしい。

密室にした意味は恐らく、暇つぶしとか、面白そうだ、とかその辺の理由だろう。

捕まらないように、なんてことはおそらく考えちゃいない。

考えていたら、もっと徹底的にやるだろう。

犯人はよほどの自信家かサイコに違いない。

それより、凶器は何なんだ？

正直、あんなふうに人をミンチに出来る凶器なんて存在するのか？

もしあったとしても、そんな代物、どっかに隠せるほど小さいか？

……分らない。

魔法でも使わなきゃ、そんなの無理っぽい。

魔法……

魔法……ねえ。

「先生、わたしそろそろ帰ってもいいでしょうか？」

「あん？ 俺はまだ、お前を白だと認めたわけでは——」

「そういえば、警察とか来たんですか？ さつきから、パトカーの音とか聞こえないんですけど」

わたしは教師が何か言うのを軽く無視し、尋ねる。

「……いるわけねえだろ」

「はあ？ 殺人事件なんですよ？ どうして、警察に通報しないんですか？」

わたしの問いに教師は気まずそうに、ぼりぼりと頭を掻く。

いや、気まずそうに見えるが、全身から怒気のオーラが立ち上っている。

……何か、嫌なことでもあったようだ。

「理事会の決定事項だ。校長も承諾した。新宿にある一流進学校の看板に傷を付けたくねえんだとよ」

その決定が、よほど不服らしく、教師は奥歯をギリリと鳴らす。

いや、不服なのは当たり前か。

普通、それをああそうですね、なんて了承出来る方がどうかしてる。

「だから、こうやってお前を監禁しているのも、俺の勝手だ。だから、そのMDを校長やら理事長やらに突き出して、クビにしてもかまわねえぞ」

「先生……」

「ったくよ……。俺は正直、五流もいいところの大学の出だ。だから、頭は他の連中なんかには及ばねえ。お前にも負ける。それを馬鹿にされたって構わん。けどよ、不条理な出来事、理不尽な出来事するのは元来の性格で許せねえんだよ。それこそ、どんな手エ使っても暴いてやる覚悟だ」

「……」

「ま、俺の見立てじゃお前は多分白だろうよ」

先ほどの剣幕はどこへ行ったのやら。

教師はのんびりとした口調で言った。

「じゃあ、何でもそこまで言いまくったのよ？」

思わず、ため口になるわたし。

「ん？ ああ、お前が、そうやってキャンキャン吠えてるの観てるの面白いからな」

「——なっ!？」

「お前さ、相手のこと馬鹿にする癖あるけれど、意外と自身が馬鹿な所あるだろ？」

「何を——」

「……まったく、俺が本気でキレてたとか思ってたわけ？」

「……違うの？」

「ばーか。教師で本気でキレルやつはクズだ。つーか、半人前以下だ」

教師は呆れたように、わたしの方を見る。

「あのなあ、教師ってのは詐欺師と同義なんだよ。いや、役者と同義かな」

「……つまり、わたしはあなたの掌で踊らされていたってわけ？」
「びんぼーん」

屈辱。

かなりの屈辱。

こんな筋肉アクセサリーだと思っていた馬鹿教師がに踊らされていたというのが、非常にムカつく。

「おーおー。いいねえ、その顔」

教師はニヤニヤしながら、わたしの顔を見つめる。

「まあ、そういうわけだ。つーわけで、後は好きにしな。俺、別にセブンのバイトでも構わねえし」

「先生」

「ん？ 『わたしいうわたしいう間違っていました』ってか？」

「違います」

きつぱりと、否定する。

教師は「何でえ、せつかく『よし！ あの夕日に向かって競争だ』って言いたかったのによ」とかと訳の分からんことを呟いた。

つーか、古すぎだろ、そのネタ。

カビ生えるとか以前に、風化しちまってるよ。

「ただ、この事件。普通の殺人事件じゃないと思いますよ」

「分かってるよ」

教師は新しい煙草をくわえ、ジッポで火を付ける。

つたく、禁煙だつーの。

「なあ、お前。最近この新宿で流行ってる妙な噂、知ってるか？」

「さあ。わたし、あまり友達いないもので」

「だろうな。性格悪そうだし」

「ほっといてください。で、何ですか？ その噂というのは」

「なんかさ、急に魔法が使えるようになった奴が増えてんだとよ」

「はあ？」

「あーやっぱ、そういう顔した。でも、マジで流れている噂だぜ。まあ、俺は信じてねえけど」

「信じてる方が変ですよ、それ」

「まあな。だけど、こんな事件見ちまうと、本当かもしれねえって思えてくる」

「先生……？」

「他にもさ、結構異常なこと起こってるらしい。一番やべえ噂は、どっかの建物が丸ごと消失したってのだな。丸ごと、瓦礫の山。警察ではガス爆発とかって見方で捜査しているらしいが、ガス爆発にしては崩壊のしかたが綺麗だよな。建物一戸吹っ飛んだってのに、そのビルだけがぶっ壊れて、他のビルは無傷なんて普通、あり得んだろ？」

教師はくわえていた煙草を携帯灰皿へとしまい込み、呟く。

「多分、これの犯人、魔法使いだぜ」

そう言う、教師の顔はいつになく真剣な顔だった。

というわけで、釈放(笑)されたわたしは早速、犯人捜しを始めた。
気分はホームズ。

・・・でも、わたし、ホームズ嫌いなんだよね。
あの自信たっぷりな所とか、人を小馬鹿にした態度とか。
わたしが好きなのは、コロンボ。

一見、ホームレスみたいだけど、実は凄腕の刑事ってところがとってもいい！
あのバーバリーのコートが欲しくて、小学生の頃、親にクリスマスプレゼントととして
ねだったことがあった。

結局買ってもらえなかったけど、それから数年経った今、バイト代貯めてゲット！・・・
・・・したのはいいけど、この身長だとかなり裾引きずるんだよね。

おかげで、現在、クローゼットの中に封印中。

封印を解かれるのはいつの日になる事やら。
・・・話を元に戻そう。

とにかく、何処の何奴か知らないが、犯人はいる。

これは当たり前だ。

自然現象であんなことになることはない。

殺された人達は別の学校の制服だった。

要するに、この学校の人間じゃない。

これは勝手な想像だけど、この殺人事件、通り魔殺人に近いと思う。

つか、あんな殺され方——わたしじゃない限り——予想できる奴いねえよ。

・・・どーでもいいけど、災害も通り魔殺人もあんまり変わらないよね。

どちらも、予想せずに訪れるっていう意味で。

「はあ・・・」

ため息がもれる。

ああ、なんか急に老けた気がするぞ、わたし。

まだ、十六の乙女なのに。

・・・まあい。

とにかく、状況を整理しよう。

人が三人(ほど)死んでいた。

図書室が、血塗れになっていた。

しかも、図書室は鍵が掛かっていた。

・・・

・・・

・・・これだけで、

これだけで、どうやって推理すんじやあああああ！

わたしや、名探偵じゃないんだぞ！

何かないのか！

犯人の落としたモノとか、

ダイイング・メッセージとか！
わああああああ！

うぎゃああああああああああああああああああ！

・・・・・・はあ、

心の中で叫ぶのって、何か虚しい。

まあ、いっか。

一度、図書室に戻ってみよう。

そうすれば、なんか分かるかもしれないし。

職員室がある三階から、図書室のある二階へと向かう。

図書室は、死体を片付けたぐらいで、どうやら、まだ何もされていないみたいだった。

幾分乾いた血が、ちよつとグロテスク。

あーあ。本当に血塗れだ。

さつきは入らなかったからよく見えなかったけど、本とかにもべったりと血が付着していた。

羅生門に血が付いてら。

・・・・・・なんか、こう言っては何だけど、似合ってるな。

夏目漱石のころとかでもOK。

でも、マジで付いてたら、わたしが犯人の血を浴びてやる。

つか、何でわたしはこんな探偵の真似事なんぞをしているんだ？

説破。多分、純粹にムカついたからだろう。

何処の誰だか知らないが、聖地とじよしつでの狼藉は万死に値するってことで。

そして、もう一つ――

多分、その犯人とやらが自分と同じ種族の人間だからだろう。

わたしは小さい頃から、通常の人間には見えないモノが視える特殊な眼を持っていた。

要するに、幽霊とか、そんなもんが視えてしまう。

それだけならばよかったのだが、神様という奴は実にイジワルで、もっと見えなくてもいいもんをわたしに視せた。

わたしには、未来が視える。

もっと、具体的に言うとならESP能力保持者。

ちなみに、ESPってのはExtrasensory Perceptionの略称。

そー言えば、預言者か占い師でも志なさいな、大きくなつてどつかの預言者さんみたい
に、本出しなさいな、なんて言われそうだが、残念ながらそういうことは出来ない。

何でか知らんが、わたしはそれを自覚的には出来ないからだ。

対象者を視ると、勝手に、網膜に、脳内に、これから起こることが流れ込んでくる。

まったく、迷惑な話だ。

ちなみに。

わたしの眼はあまり優秀じゃないようで、いつ、世界がぶっ壊れるか、人間がいつ死に
絶えるか、なんつーことは視れない。

どう頑張っても、いつも通りに暮らし、世界は廻る。
どうやら、人間様というのはゴキブリのごとくしぶといようで、結構長生きするらしい。
こちらにも、迷惑な話だ。

さて――
どうすっかな。

わたしの能力は気まぐれなことを差し引いても、戦闘向きでは決してない。
しかし、この魔法使いさんはバリバリの戦闘系の能力を保持してる。

わたしは十六年の人生の中で喧嘩以外に格闘術や武道の経験はない。
つまり、勝ち目はまったくくない。

ということは、戦闘になったら間違いなく死ぬ。
・・・嫌だなあ。

別に、ネクロフオビアじゃないから、死にたくないとは思わないけど、こんな風にハン
バーグの材料みたくはなりたくない。

そーいや、何かの本でジェットモグラに乗ると、帰ってきたときは乗組員はムースにな
るとか書いてあったな。

ある程度形があるから、あれよりかはこっちがマシか。

・・・んなわけねえだろ！

一人ツツコミ。

・・・淋しいなあ。

ちなみに、わたしは三号が好き。

「・・・気を取り直して」

わたしは自分に言い聞かせるように、そう呟くと、辺りを見回した。

辺りには至る所に斬り裂かれたような跡があった。

本棚にも、

壁にも、

天井にも。

これは明らかに刀傷だ。

「ふむ。犯人は侍だな」

・・・魔法使いじゃないのか。残念だなあ。

恥ずかしながら、わたしは自分の能力以外に超能力なるものを見たことがない。

だから、一度見てみたかったんだけど――

「侍じゃ、魔法なんか使えないよねえ」

あーでも、ゲームとかじゃ剣士ドランでも魔法使えるか。

まあ、侍だから、でっかい蛙喚ぶくらいしか出来なさそうだけど。

でも、アレも見てみたい。

「どーでもいいけど」

わたしは最初から思っていて、んで、あんまり言いたくなかったことを口にした。

「犯人、とっくに逃げてるよね」

当たり前だ。

あたりまえだ。

アタリマエダ。

あたり前田のクラッカー。

・・・六月だというのに、どこからか冷たい風が吹く。

お後がよろしいようで。

つーかさ、推理小説でもなきや、都合良く犯人なんざいるわけねえだろ！

『犯人はこの中にいる！』

当たり前だ。

そうじゃなきや、探偵は推理出来ねえ。

犯人逃げてましたじや、お話は進まない。

つたくさ、探偵共はチョーシこいてニヒルな口調で推理ショーやってやがるけど、もう

ちよつと、作者に感謝とかしねえのかね。

・・・とかと、八つ当たりしても仕方ない。

このお話は推理小説じゃない。

だから、推理ショーなんぞさせてくれない。

仕方ない。

本当に、しゃーない。

この話はいい加減な話だ。

きつと、作者はいい加減な奴に違いない。

だから、わたしもいい加減にやらせてもらおう。

推理はなしだ。

言つたもん勝ち。

そこには論理ロジカルなんかない。

あるのはイカイラジカルれた論理だけだ。

だから。

だから、さ——

「隠れてないで出て来なよ」

わたしはカウンターに隠れている物陰に言った。

「ふん。ただの小娘に見つかるとは僕も落ちぶれたね」

現れたのは中学生だった。

坊ちゃん刈りに黒縁の瓶底眼鏡に半ズボン。

つーか、人のこと言えないけど、絵に描いたようなガリ勉君だ。

一世紀、生まれるところ間違えたんじゃない？

今時、蝶ネクタイなんか普段着でつけてるガキなんざいねえよ。

しかも、狙ったようにワイシャツにサスペンダーだし。

何かのコスプレかなあ？

「まったく、変な侍から逃れたと思ったら、今度はガキか」

ガリ勉君はぶつぶつ呟く。

何だか、わたしのことはあんまり気にしていないみたい。

つーか、わたしはあんたよか年上だ。

敬語を使え、敬語を。

「まあ、見たところアンタは一般人らしいし、大した力もなさそうだ」
言って、ガリ勉君は右掌を得意げにわたしに突き出した。

「魔法を見るのは初めてかい？」

その掌からは雷火が迸る。
わー綺麗だなあ。

「まったく、天使様も人が悪いよ。僕みたいな優秀な人材を処分しろだなんて」
不本意だ、と言わんばかりにガリ勉君は顔をしかめる。

ま、要するに腹いせでわたしを殺す気ってことだけは何となく分かった。

「はいはい。ちよつとストップ」

「何だよ、命乞いかい？」

「似たようなものね。一つ質問いかしら？」

「何だよ？」

「図書室をプールにしたのはあなた？」

「そんな訳ないだろう。僕の能力はあくまでも、こうやって雷を生み出すだけなんだから。これをやったのは銀髪の侍さ」

馬鹿だ。

こいつ、自分の能力バラしやがった。

こういうときは、自分の情報を極力バラさないようにするのが定石だというのに、あるうことか、自分から公開するとはド三流もいいところだ。

その天使様ってのが、何者か知らないがこいつをクビにしたのは分かるような気がした。コイツは確かに力ではわたしより強い。

だが、口先ならわたしの方が強い。

わたしの最大の武器はこの未来を視通す眼ではなく、舌なのだ。
さて。

こちららも、先ほどの腹いせに虐めてやろう。

さあ、この世間知らずのお坊ちやまはどんな声で泣くのかしら？
実に愉しみだわ。

・・・・・・・・・・・・・・・・うーん。わたしって結構Sかも・・・

今度、衣装作ってみようかしら？

「ふーん。で、銀髪の侍ってのは？」

「さあね。詳しいことは知らないよ。メサイアに最近入った奴だから。ただ、天使様のお気に入りだね。いっつも側に侍らせているんだ」

救世主？

はて、どっかで聞いたような・・・？

・・・・ああ、アレか。

パチンと、思考の花火が飛ぶ。

確か、最近新宿に出来た少年グループの名称だ。

まだ出来て一年も経っていない新参のグループのくせに、古参のグループを潰し周り、この辺り一帯のパワー・バランスを変革してしまったってことで——ちよつと裏の事情に詳しいティーンになら——有名なグループだ。

おじさんの話だと、派手に暴れてるくせに立ち回りがよく、逮捕者がまだ一人も出ていないそうだ。

でもま、多分その記録もそろそろ破られるだろう。

目の前の奴が、お縄に掛かるから。

・・・いや。

こいつはクビになったんだっけ。

じゃあ、意味ないか。

残念。

「そう。それで、何で君は殺されそうになってるわけ？」

「ふん。そんなの知らないよ。急に決まったんだ。僕を含めて四人。それで、逃げてる最中なわけ」

「ああ。それでこの学校に逃げ込んで来たわけね」

「そういうことだよ。だから、手っ取り早く君を殺して逃げるんだ。なに、僕はこれまで十人以上殺してきている。今更、一人殺しても大して変わらないよ」

「でも、そいつも近くにいますでしょ？ わたしを殺してもあなたが死んだんじや、意味ないじゃない」

わたしがそう言うと、ガリ勉君は黙り込んだ。

案外、素直らしい。

結構可愛いじゃないの。

「それよりも、警察に捕まった方が安全よ」

「嫌だ。僕の経歴に傷が付く」

「大丈夫よ。あなた、年はいくつ？」

「・・・十三歳」

その年だと、中一か、中二ぐらいだろう。

ふん。中坊如きがわたしに勝つなら、六十億年早いんだよ。

「なら、大丈夫よ。十三歳なら何やったって、二十になれば帳消しになる。だから、警察に捕まっても平気よ」

なーんてね。

確かに、少年犯罪は二十になれば帳消しになるけど、世間の情報網は素晴らしい。

大企業なんかは、入社試験の時に秘密裏に探偵雇って徹底的に受けた奴の前歴を調べ上げる。

そんな時、少年の頃犯した犯罪がバレないわけがない。

それに、殺人とか凶悪犯罪になれば、二十じゃ出てこれないこともあるし。

つまりは結果的に、一度負った経歴の傷は二度と治らない。

よい子のみんなは気をつけよう。

「・・・そうだった」

ガリ勉君は今更思い出したように、言った。

本当に、こいつは純粋な奴だよ。

今時、痕ぐらいの知識、小学生でも知ってるぞ。

「じゃあ、警察に行って保護してもらおうか。大丈夫よ、わたしのおじさん警視庁に勤

めてるから」

わたしは満面の笑みを浮かべ、ガリ勉君に手を差し伸べる。
くっくっく・・・

こいつの人生が暗闇に閉ざされるのは時間の問題。
ざまーみる。

一生、下水道の中で這い蹲ってる、この引き籠もり。

テメエの住む場所なんぞ、この太陽の当たる場所なんかにはねえんだよ。
頭に椎茸でも生やして、一生を終えやがれ。

・・・あーでも、魔法はどうやって立正すればいいのかな？

その辺はあの究極アルティメット・スレイバーの掃除屋にでもやってもらおう。

ガリ勉君はおずおずと、わたしの手を取る。

あー楽な勝負だった。

さて、まずはおじさんに電話だ。

そのあとに、こいつの絶望に染まった顔を想像しよう。

・・・あの変態、またアキバで同人漁ってるんじゃないやねえだろうな。

そういうとき、携帯の電源切ってるんだよなあ・・・

思っ、わたしはスカートのポケットから携帯を取り出そうとして――
バチン

せっ、静電気!?

何で？

乾燥してたっけ、今日？

いや、まさか――

「平賀 源内のエレキテルって知ってるかい？」

ガリ勉君はわたしに尋ねる。

先ほどとはうって変わって、憎たらしい笑みを浮かべながら――

「ええ。知ってるわ」

しまった。

まずい。

感づかれていた。

「お姉さん、よく詰めが甘いって言われるでしょ？」

うっ・・・

つい、一時間ほど前に言われたような・・・

「少年犯罪のことなんぞ、今時知らないのは犬猫ぐらいだよ」

「そうね・・・」

くそう！

一日で同じミスを二回もやらかすなんて！

畜生！

「こういう態度してるとね、結構得なんだ。子どもってやっぱり便利だよ」

「っ・・・」

「一応、冥土の土産に教えておいてあげよう。僕の能力を――」

バジッ

携帯が、爆発した。

「このように、電磁波を操って携帯を爆発させたりして、対象者を事故死に見せかけることも可能なのさ」

ガリ勉君は得意げに言う。
くそう。

憎たらしい。

「最近さ、ニュースになったろう？ ビル一戸無くなったっていう事件。あれ、僕がやったんだよね。あの周辺の電磁波を上手く操って、電子機器をぼかん。結構難しかったけど、成功したときは嬉しかったね」

「・・・・・・どうせなら、ビル破壊関係の仕事に就けば？ 経費の節約にもなるし」

「それはいい考えだね。考えておくよ」

言いながら、ガリ勉君は図書室を出ようとする。

「殺すんじゃないかったの？ 怖くなって逃げる気？」

「いやいや」

ガリ勉君は嗤いながら首を振る。

「この図書室を巨大な電子レンジにするんだ。ちょうど、窓も全部閉め切ってるしね。さすがに至近距離でそんなことやると、僕まで死んじゃうから離れるんだよ。僕の能力は遠隔操作がウリなんだ」

「・・・・・・」

「どうした？ もっと怖がってくれよ。じゃなきや、つまらないじゃないか」

怖がる・・・か。

そりゃあ、わたしの台詞だよ。

何故って、あんたは——

「すぐに、殺されるんだからさ」

「？」

「つたく、この眼は本当に気まぐれだ。

でも、今回ばかりは感謝するわ。

いつかりと、視えた。

彼の、未来が——

風が、唸る。

じゃらりと、鎖の音をさせながら。

「ふっ——」

ガリ勉君はそれしか、言えなかった。

言葉を紡ぐより疾く、頭部が切断されてしまったから。

水風船を投げつけて爆発させたように、血飛沫が飛ぶ。

その後、どさりと彼の頭部が落ちてくる。

マヌケ面。

大きく口を開けちゃってさ。

わたしはちらりと後ろを振り返る。

そこには一人の男――

年は二十ほど。

上質な銀を溶かしたような肩まで伸びた銀髪に、ナイフを連想させる細く鋭いアイス・ブルーの瞳。

服装は下着のような汚れた白いシャツに、膝が破れたジーンズ。

右腕には枷がはめられ、そこから頑丈な鎖が伸びており、それが彼の手に握る刀に連結されている。

彼の、刀――

おそらく日本刀だ。

だが、何故かローマ字で名が彫られている。

MURAMASA、と――

・・・パチもん？

いや、でも切れ味は凄いいし・・・

古さで言ったら、国立博物館で見たやつぐらい古い。

新解釈、実は村正はペリーが伝えた。

・・・こんなん、どうだろう？

しかも、よく見ると色々日本刀と違う。

まず、柄。

何か、これは西洋の両手剣ものを連想させる。

それに肝心な、刃。

なんと、両刃なのだ。

・・・刀なのに両刃。

ありえねえ。

形だけ知って、適当に外人の刀匠が創ったような――

つか、多分そうだろう。

その証拠に、あのローマ字だ。

「何を見ている？」

男は怪訝そうな顔で尋ねる。

「いや、別に。それより、こんな現場を見たわたしを生かして帰してくれるほど、優しい人じゃなさそうね」

多分、図書室で肉塊になっていた連中はコイツに殺されたんだ。

この、目の前にいる銀髪の侍に――

――殺人鬼

これほど、この二つ名が似合う者も珍しい。

人殺しではない。

異常者でもない。

こいつは、殺人鬼なのだ。

血も涙もなく、
息をするように、
人を、殺す。

人の道を外れた鬼——
どうする？

どうやって逃げる？

このままダッシュで走れば、何とか図書室からは逃げられるだろう。
これでもわたし、短距離には自身があるのだ。

けれど、それで済むのか？

見逃してくれるのか？

こいつは、警察に捕まることを怖れるようなちんけな奴ではない。

たとえ、教師の目の前だとしても、平気でわたしを肉塊に変えるだろう。

そして、それを見た教師も肉塊に変える。

完全犯罪。

目撃者が、誰もいないのだから——

くそう。

わたしも、これまでか・・・

マンガみたいには言わないまでも、

もうちよつとマシな死に方がしたかった。

それに、若干二名に馬鹿にされたまま死ぬのも嫌だ。

くそう。

くそうくそうくそうくそうくそう！

わたし、まだ、死にたく、ないよ・・・

「いや、帰すぞ」

はい？

思わず、ズっこけた。

「面白い奴だな。何もないとこでコケるなんて」

男はぶん、と血糊を払い、刀を鞘にしまうと、わたしに目線を合わせるために屈む。

「何だよ、普通こういうの見られたら、見た奴殺すでしょ」

「いや、そのような命は受けてない。故に、お前を殺す道理はない」

「はあ」

曖昧に答えるわたし。

「しかし、どうやってここに入った？ ちゃんと鍵を掛けておいたはずだったのだが」

・・・・・・ああ、コイツか。

密室（もどき）作ったの。

「・・・・・・」

男はじつとわたしを見つめる。

「な、何よ・・・・」

「何が——」

「はあ？」

「お前の瞳には何が視えているのだろうな」
男はじつと、わたしの瞳を覗き込む。

「見たところ、万里眼に近いな。だが、それとはどこか違う。おそらくは、ウイスダム・ウイザード未覚醒者
だろうが、血に狂いそうもない。実に面白い。お前を見ていると——」
男は笑う。

どこか、危険な獣を思わせる様な、笑みで——

「あの男に似ている。鎖に架せられた魔狼に、な——」

「……はあ」

「似ているのだ。しかし、どこか違う」

「そりゃあ、わたしは男じゃなくて女だし」

「……男と女では何か違うのか？」

「当たり前でしょ！ そもそも、遺伝的性質からして完全に別物でしょうが！」

あーもう、調子狂うなあ……！

「ふむ。そういうものなのか。取りあえず理解したぞ」

なんか、ターミネーターに言葉を覚えさせている気分……

「で、あなた、名前は？」

「ふむ。名前か。俺は名乗るほどの名を持っていない故、好きに呼べ」

「あーじゃあ、変態でどう？」

「変態か……独創的だが、実に良い名だ」

げっ、本気で言ってるやがる……

「では、さらばだ。あまりここに長居をすると主を煩わせることになる」

言って、男は姿を消した。

現れたときと同じように、風を唸らせながら。

「……何だったのかなあ？」

わたしはボリボリと頭を掻きながら、呟く。

ああ、なんか散々な一日だった。

図書室がプールになっていて、

脳みそまで筋肉とクソ生意気なガキにからかわれて——

えーと、わたし最初何しようとしたんだっけ……？

あーそうだ。

本を借りようと思ったんだ。

わたしは、まだ血の付いていない本棚へと歩いていき、本を数冊抜き取った。



「あーもう、あいつはいつもそうなんだ。まったく、ちゃんと電話にはすぐ出なさいよ！」
少女はブツブツ言いながら、携帯を切る。
年は十代後半といったところか。

淡い栗色の髪を腰まで伸ばし、それをツインテールにしている。
服装はビーズで蝶が描かれている黒いシャツに、ジーンズにサンダル。

別に派手でもなく、地味でもない、そんな少女だった。

「あの・・・別に、お構いなく」

隣には女子高生が一人。

紺色のブレザーに、赤いネクタイ。ブレザーには彼女の通っている高校の物と思われる校章が着けられている。

温和しそうな少女だった。

今時珍しく、髪も染めず、化粧といえば唇に引いたリップぐらいだ。

「いや、こういうことはちゃんと言わなきゃならないのよ！ でないと、アイツは直ぐにつけあがるんだから」

「はあ・・・」

女子高生は気のない返事をする。

「大丈夫よ、ちゃんとあなたの依頼は解決してあげるわ。あいつは人間的には失格でも、こういう事件は警察や探偵なんかより凄いんだから」

言って、少女は自慢げに笑う。

「・・・信頼しているんですね」

「まあね」

「いいですね・・・そういうの」

「そう？」

「はい。わたしは誰かを信頼したこと、ないですから」

「亜美ちゃんだって出来るわよ、わたしにだって出来たんだから」

「そういうもの、なんですか」

「そういうものよ」

少女は空を仰ぐ。

「わたしね、六月って嫌いなんだ」

「はあ・・・」

「でも、今はそうでもない」

「どうして、ですか？」

「何でだろ。たださ、アイツがいると、どんな日でも嫌じゃなくなるんだよね」

「・・・それは、いいですねえ」

亜美は言う。

頬を赤らめ語る少女を眺め、無慈悲な笑みを浮かべながら――

「四、未来を視る者／了」